

研究ノート

下伊那の馬と富本銭

……下伊那地域の 5 世紀中頃から 8 世紀初頭にかけての

考古学から見た歴史動向への予察……

西山 克己

はじめに	4 文献に見える科野の重要性と馬
1 下伊那地域の先進性と重要性	5 下伊那地域と富本銭
2 前方後円墳を中核とした古墳群の形成	おわりに
3 選択された座光寺地域	

はじめに

1999年1月20日の奈良県飛鳥池遺跡出土「富本銭」の報道以来、富本銭の性格等について様々な話題を呼んでいるが、これを受けて長野県下伊那郡高森町の武陵地1号墳の石室より富本銭が1枚出土していることが改めて公表されることとなり、3月23日には飛鳥池遺跡出土の富本銭と類似するものであることが発表された。

それではなぜ高森町武陵地1号墳の石室より富本銭が1枚出土したのであろうか。現時点で考えられる事を予察として簡単にまとめてみたい。

1 下伊那地域の先進性と重要性

東国の古墳時代における大陸や朝鮮半島からの新来文化の受容の時期は、大きく2時期に分けることができる。その1つは5世紀中頃から6世紀代にかけてのことで、その内容は馬の飼育と活用・須恵器生産と使用・日常使用する土器組成の変化・カマドの構築と使用・金銅製品の使用・横穴式石室の受容と埋葬観念の変化等があげられ、もう1つは7世紀代における律令国家誕生前夜の頃と言えよう。

上記の内、簡単にカマドと馬と須恵器についてふれて見たい。

長野県内のカマドの出現については、すでに西山克己が明らかにしている。それによると善光寺平南域や下伊那地域の5世紀中頃から6世紀前半にかけての先進文化を積極的に受け入れたいわゆる拠点集落と考えられるムラでは、須恵器 TK208型式、年代的には5世紀第3四半期から第4四半期の移行期頃にカマドが付設され始め、科野の集落全体にカマドが波及するには6世紀に入らねば実現しないことを考えれば、その先進性を伺うことができよう(文献1・2・3)。

また、カマドの付設と同様に住居内構造の変化として、間仕切り構造を持つ住居が現れる。ここで言う間仕切り構造とは、住居床面に壁から柱穴にかけて浅い溝を掘り、その溝に間仕切

り材を据えたと考えられるものである。

この間仕切り遺構については、善光寺平における長野市本村東沖遺跡において多くみられる（文献4）。本村東沖遺跡では5世紀後半と考えられる多くの住居にカマドが付設され、これらの住居跡からは地元で生産されたと考えられる須恵器が多く出土し（文献5・6）、また調査された住居跡の約半数から間仕切り遺構が確認されている。下伊那地域でも点々といくつかが確認されているが、その中でも特に良好な資料として5世紀末葉頃と考えられる飯田市殿原遺跡88号住居跡（文献7）や前の原26号住居跡（文献8）をあげることができる。このようなことから、これらは渡来系の人々やその末裔、あるいは新来文化を積極的に受容した在地豪族層を中心とする集落とも考えらる。

このような例は善光寺平での本村東沖遺跡や、下伊那の殿原遺跡や前の原遺跡などの数例以外ではほとんど確認されていない。このように間仕切り構造はカマドとともに家屋構造の一つとして同じ頃に伝えられたものと考えられる。

それでは馬についてはどうであろうか。

現在、科野（長野県）において確実に最も古い馬と言えるのは、長野市篠ノ井遺跡群 SK6042 土壌から出土した4世紀後半の馬歯から考えられる馬の存在である（文献9・10）。

この発見と相前後して山梨県甲府市塩部遺跡の方形周溝墓の周溝からも同時期の馬歯が確認され（文献11）、中部高地においてはすでに4世紀後半に馬が存在したことがわかってきている。しかしこの馬はどのような目的で人間と接していたかについては不明な点が多く、今後の類似例の発見や研究に期待が寄せられている。

それでは伊那谷の馬の存在はどのようなものなのであろうか。

科野では日本全国から出土している馬具の2割以上が出土しており、またこの内の3割以上が飯田市を中心とする下伊那地域に集中している（文献12）。このような馬具の出土に注目し、東国舎人との関係を論じた岡安光彦氏の論考（文献12・13）や、科野国造と馬の生産や管理を論じた桐原健氏の論考（文献14）は注目すべきものである。

また、さらに注目すべきこととして、上記のカマドや間仕切り構造が採用された頃、すなわち5世紀後半代に下伊那地域には馬の墓が集中して造られることとなる。馬の墓は5世紀第3四半期頃を初現として、飯田市座光寺・上郷・松尾と言った3地域に28例もが集中し（文献15・16）、この馬の墓は殉葬されたものであろうと考えられている。これらについての研究は、全国的視野から研究した桃崎祐輔氏（文献17）や松井章・神谷正弘氏（文献18）の業績をがあり、これらの研究を参考に下伊那の馬の埋葬について簡単にふれてみたい。

これまで日本全国で確実に5世紀後半代に古墳および周溝墓の周溝内・周溝内土壌・周溝近接土壌に造られた馬の墓と考えられている資料数は60数例に過ぎず（文献17）、下伊那地域以外での発見例では熊本県に20例ほどが集中し（文献19）、残りが他地域に散在している状況である。いずれにしても全国での発見例の半数近くが飯田市の3地域に集中していることは特筆すべきこととして見逃すことはできない。

この馬を埋葬する行為は5世紀初頭に東北アジア諸民族から高句麗を経て、新羅や伽耶諸国

に伝わり、さらに5世紀中頃から後半にかけて日本に伝えられたと考えられているが、これらの馬の埋葬は、基本的には死者の埋葬に伴う殉葬と考えられている（文献17・18）。日本国内の古墳時代の馬の殉葬例は、南は宮崎から北は青森にまでおよぶが、5世紀後半代と言う限られた時期に、一地域の古墳および周溝墓の周溝内・周溝内土壌・周溝近接土壌と言った限られた場所に、一部ではあるが馬具を装着したままの殉葬例が見られることは、熊本県に類似した傾向が見られるものの（文献19）、下伊那地域の特異性を示すものと言えよう。

この中で特に良好な資料としては、新井原12号墳隣接4号土壌墓より馬の骨・歯とともに5世紀第4四半期頃と考えられるf字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鋳・貴金具が出土し（文献20・21・22）、茶柄山古墳群・馬の墓10からは馬の下顎骨の下部より5世紀後半頃の鉄製輪金具と三環鈴が出土している（文献21・22）。また新井原2号墳周溝内土壌3基からは馬の歯が見つかり、同周溝内から5世紀第3四半期頃のものと考えられる木芯鉄板張輪鏝が出土し（文献21・22）、物見塚古墳周溝からは馬の歯と5世紀第3四半期頃の鏝轡が出土し、それぞれ装着されていた状況が想定されている（文献21・22）（註1）。

さらに馬を殉葬する風習は朝鮮半島を経由して日本に伝えられたことは先にも述べたが、新羅や伽耶における殉葬例は馬具などは付けず、裸馬のままの殉葬であることが確認されていることから、下伊那地域の例を含め、馬具を装着した殉葬の在り方は日本における大きな特色と言えよう。

当時、鉄と馬をより多く入手、保有することは、軍備的優位な立場におかれることから、畿内大和政権にとっては重要な任務であった。軍馬の調達を目的とした大和政権の指示のもとに派遣された馬生産に秀でた渡来人あるいは渡来系の人々は、下伊那地域の政治的・経済的効果を向上させる大きな手段となる馬生産に関わり、新来文化を積極的に受容しようとした在地有力豪族層と密接な紐帯関係を保つことにより、より在地化することとなり、在地有力豪族層同様に政治的・経済的に力を蓄える結果となったと考えられる。以上のことから、当時軍馬あるいは運搬手段として重要な役割を果たした馬にあでやかな馬具を装着させて殉葬させたことは、その主体墓に埋葬された人物との寵愛関係あるいは威信を示すための行為であったとも考えられることから、馬の殉葬を伴う古墳や周溝墓の埋葬者は、馬生産に関わり、新来文化を積極的に受容し、後の東国舍人として成長していく在地有力豪族層や、畿内大和政権の指示のもと、当地に派遣され馬生産に積極的に関わって力を蓄えた渡来人あるいは渡来系の人々と考えられ、殉葬の日本化により威信財としての馬具を装着させたままの殉葬を試みたとも考えられる。またこの末裔達の一部が馬生産に関わる主導権を握ることにより、より在地有力豪族化し、本来の在地豪族層とともに東国舍人の中心的存在として成長していったものと考えられる。

須恵器についてはどうであろうか。長野県内で初期須恵器が多く見られるのは、初期カマドの分布と同様に善光寺平と下伊那地域である。ここで両地域の特徴を見てみると、TK216型式やTK208型式と言った須恵器が他地域に比べ多く用いられ、それらの中には在地産須恵器と考えられるものが見られることである。善光寺平では長野市本村東沖遺跡出土の多くがその好例と言え、風間栄一氏はこれらの一群を「浅川型」須恵器と位置付けている（文献6）。下伊那地

域では飯田市茶柄山遺跡出土資料に新羅地域の陶質土器に類似した在地産と考えられる台付壺他の好例が見られ、他の遺跡出土資料においても好例が散見できる(註2)。このように在地産と考えられる須恵器を多く用いていることも、その先新性の一端を示すものと言えよう。

2 前方後円墳を中核とした古墳群の形成

下伊那地域では現在5世紀中頃以降の古墳から27例もの甲冑が出土し、北は座光寺地域の新井原2号墳から南は川路地域の月の木1号墳や立石地域の円墳からの出土も見られ、武人と考えられる在地豪族層が点在していたことが伺える。しかし5世紀後半代以降に、大和政権との関わりの中で、帆立貝形古墳を含めた前方後円墳が築造されることとなり、現在31基もが確認されているが、これらは天竜川東岸の郭1号墳を除いてすべてが天竜川西岸に分布し、在地豪族層の勢力は、立地状況などからおおよそ6群に集約されることとなる。今後の研究によっては5群あるいは7群となることも考えられる。

6群とは、北から座光寺地域・上郷地域・松尾地域・駄科地域・桐林地域・上川路地域である。

これら前方後円墳の横穴式石室を中心に型式分類やその意義について論じたものとして、白石太一郎氏(文献23)や楠本哲夫氏(文献24)の研究がある。ここでは詳細についてふれないが、両氏の研究から6世紀初頭以降の前方後円墳への横穴式石室の構築は、大和政権における東国支配の拠点づくりによる結果であり、この拠点づくりには、畿内豪族のみならず5世紀後半代より馬生産を中核とした畿内豪族との紐帯関係によって力を蓄えてきた下伊那地域の地方豪族、さらには馬生産に直接関わった渡来人・渡来系の人々が関わった結果によるものであるとした。このことは、当地域の今後の成り立ちを考える上でたいへん重要な指摘であると言えよう。

3 選択された座光寺地域

このような馬生産を基本に、いざ有事には騎馬兵として活躍した東国舍人集団の存在については、岡安氏の研究によって明らかにされたが(文献12)、下伊那地域の5世紀後半から6世紀代の前方後円墳を中心とする古墳群の在り方から、それらの舍人集団は上記の6地域を核としながら馬生産と農業に従事していたものと考えられる。6世紀代においては、前方後円墳を中心とする古墳の在り方から、それぞれが大和政権との結び付きにより力を伸長したが、7世紀中頃になり、新たな大和(飛鳥)政権による律令体制整備に伴う地域再編から、下伊那地域においては突然集落が減少し、古墳数も激減してほとんどが追葬状況となる。このような中で、座光寺地域は他地域よりも当期の集落遺跡が多いことが指摘されているが、6地域それぞれの政治・経済的力関係や地理的環境等によってそれぞれが淘汰された結果、座光寺地域が最終的に重要視されていくこととなったと考えられる。

4 文献にみえる科野の重要性と馬

7世紀後半代における科野の重要性については、壬申の乱に関連して、天武元(672)年6月「東山の軍を発す。私記に曰く、安斗智徳の日記を案ずるに云はく、信濃の兵を発さしむと。」(文献25)と釋日本紀には記され、この記載から東山軍とは科野兵のことであり、大海軍と合流すべく国司とともに神坂峠を下り、科野兵は東山軍として勝敗を左右するほどに活躍したとされている(文献26)。また天武13(684)年2月には「是日、三野王・小錦下采女臣筑羅等を信濃に遣はし、地の形を看しむ。将に此の地に都せむとするか。」(文献25)や、同年潤4月「三野王等、信濃國の図を進む。」(文献25)、さらには天武14(685)年10月「信濃國に行宮を造らしめ、東國の温泉に幸せんと擬す。」(文献25)とあるように、科野を副都候補としたことから科野が大和(飛鳥)政権にとって重要な地域であったことが伺える(文献26)。

さらに、天平宝字8(764)年に天皇に直結するかたちで牧を管理し、馬(特に騎馬)の生産から飼育・管理まで行う内厩寮が設定され、まずは信濃に設置されることとなった(文献27)。

類聚三代格による神護景雲2(768)年の記載では、「……略……正月廿八日の格に倂く、内厩寮の解に倂く、信濃國牧の主當伊那郡大領外從五位下勲六等金刺舎人八麿の解に倂く、課欠駒は数を計り決すべし。……略……」(文献25)とあり、内厩寮の管理に信濃牧主当伊那郡大領金刺舎人八麻呂があたっていたことがわかる(文献27)。この金刺舎人八麻呂は伊那の在地豪族と考えられる。

また、延喜式による弘仁14(823)年の記載には、武蔵・甲斐・上野・信濃の4国より240疋もの馬が貢馬されたことが記され、その内訳を見ると武蔵(牧4・馬50)・甲斐(牧3・馬60)・上野(牧9・馬50)・信濃(牧16・馬80)とあり、信濃が他地域よりも馬生産が盛んであったことがうかがえる(文献27)。

以上のことから、科野あるいは信濃においては、馬の生産・管理は重要なものであり、さらには伊那の在地豪族金刺舎人八麻呂が信濃牧主当であり、内厩寮の管理にあたったことを考えれば、下伊那地域は科野のみならず、東国支配を視野に入れた意味での重要な拠点であったと考えられるのである。

5 下伊那地域と富本銭

今回、武陵地1号墳から1枚の富本銭が出土したが、古墳からの出土であることや、さらには長野県内での皇朝十二銭の性格を考えると、武陵地1号墳での富本銭は厭勝銭であることはまちがいない(文献28・29)。使用された時代は下るが、茅野市乞食塚古墳では和同開珎4枚と神功開寶1枚の出土例が知られ、一古墳(横穴式石室)からの複数の追葬品(註3)例や、さらには隣接する恒川遺跡群から和同開珎銀銭が出土していることを考慮すれば、武陵地1号墳でも富本銭の複数追葬品の可能性も考えられなくはない。石室内および周辺の調査をすることにより明らかになるかもしれない。

また、武陵地1号墳の富本銭や恒川遺跡群の和同開珎銀銭の出土から、科野のみならず、東国の中でもいち早く鑄造貨幣が持ち込まれたことが伺え、この事実を考えれば7世紀後半代の

壬申の乱における科野兵の活躍や、天武朝期における日本書紀などに見られる副都候補からも、科野の重要性は明らかであり、これらから察せられるように科野の玄関口であり、また東国への玄関口でもある下伊那地域に、飛鳥の都からは多くの官人や役人が往来したものと考えられる。この往来した都人が東国へ下るにあたり、都では流通貨幣を意図した富本銭や和同開珎銀銭をあえて災いから身を守るため、あるいは穢れを祓うために、初めから厭勝銭として持参して来たものとする。

このように、下伊那へ来た官人・役人達は、富本銭に対して、流通貨幣としての価値観のみならず、厭勝銭としての価値観を理解していたことを考えれば、かなりの知識人であったと考えられる。

おわりに

以上のように、下伊那地域は5世紀中頃以来、馬による地域振興に成功し、7世紀後半に至っては、科野（信濃）および東国を律令体制下に再編成する重要拠点としてその役割を果たしたとも言え、特にその中心的役割を果たしたのが、恒川遺跡群を中心とする座光寺地域であったと言えるのである。

またいち早く当地域に富本銭や和同開珎銀銭が持ち込まれたことについては、大和（飛鳥）政権における座光寺地域の重要性が背景にあったと考えられる。

一年後に刊行される「長野県の考古学2」にむけて、さらに当地域の5世紀中頃から8世紀初頭にかけての古墳・集落の動向についての分析を続けることにより、より詳細な歴史動向が明らかになるよう努力したいと考える。以上をそれに向けての予察としたい。

最後になりましたが、当予察を書くにあたり、多くのご教示、ご指導をいただきました小林正春氏・山下誠一氏・吉川豊氏・馬場保之氏・渋谷恵美子氏・木下亘氏に心よりお礼申し上げます。

追記

当研究ノートを提出したのは1999年4月15日である。それから約2ヶ月後の6月5日、今度は飯田市座光寺地域より富本銭が発見されたことが報じられた。現在では高森町の武陵地1号墳、飯田市の座光寺地域となっているが、5世紀中頃から8世紀前半には恒川遺跡群を中心とする同一地域であり、当地域から富本銭2枚、和同開珎銀銭1枚が出土している意味は大きい。富本銭においては、畿内以外での発見例として、全国でも当地域にのみ2枚が発見されただけで、また和同開珎銀銭においては、東国で発見されている2枚中の1枚と言うものである。これまで当論で述べて来たように、特に7世紀後半に至っては、恒川遺跡群を中心とする地域がいかに重要視された地域であったかをさらに補強する座光寺地域での富本銭の発見であったと言える。

註

1. 新井原12号墳隣接4号土墳墓出土f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鉤・責金具・茶柄山古墳群馬の墓10出土鉄製輪金具と三環鈴・新井原2号墳周溝内出土木芯鉄板張輪鑑・物見塚古墳周溝出土鑑轡の年代については、西山が与えた。
2. 茶柄山遺跡や他遺跡出土須恵器を実見させていただいき、あわせて小林正春氏、渋谷恵美子氏、木下亘氏にご教示いただいた。
3. 死者の追葬が確認されていないため、あえて追葬品とした。

参考文献

1. 西山克己 「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年
2. 西山克己 「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No316 ニューサイエンス社 1990年
3. 西山克己 「下伊那の古墳時代における新来文化の受容」『伊那』第47巻第4号 伊那史学会 1999年
4. 千野 浩他 『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993年
5. 飯島哲也 「第5章4本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993年
6. 風間栄一 「長野市地附山古墳群上池ノ平2号墳出土の須恵器」『信濃』第50巻第7号 信濃史学会 1998年
7. 山下誠一 他 『殿原遺跡』飯田市教育委員会 他 1987年
8. 馬場保之 他 『前の原遺跡』飯田市教育委員会 他 1990年
9. 茂原信生・櫻井秀雄 「篠ノ井遺跡群 成果と課題編 第8節篠ノ井遺跡群出土の動物遺存体」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター他 1997年
10. 西山克己 「篠ノ井遺跡群 概要・遺構編 第2章第3節古墳時代前期の遺構」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター他 1997年
11. 村石眞澄 「2, 塩部遺跡」『山梨考古』第55号 山梨県考古学協会 1995年
12. 岡安光彦 「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵 考古資料と文献史料による総合的分析の試み」『考古学雑誌』第71巻第4号 日本考古学会 1986年
13. 岡安光彦 「東国舍人騎兵の成立と下伊那地方」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994年
14. 桐原 健 「科野国造の馬」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994年
15. 小林正春 「伊那谷ははたして先進地か」『長野県立歴史館 飯田・下伊那セミナー飯田下伊那の先進性』長野県立歴史館 1998年
16. 山下誠一 『寺所遺跡』飯田市教育委員会 1999年
17. 桃崎祐輔 「古墳に伴う牛馬供犠の検討—日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して—」『古文化談叢』第31集 九州古文化研究会 1993年
18. 松井 章・神谷正弘 「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第80巻第1号 日本考古学会 1994年
19. 島津義昭・高木正文 「熊本の古墳」『日本考古学協会1994年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1994年
20. 今村善興・小林正春 「新井原12号古墳」『長野県史考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
21. 吉川 豊 「飯田市内における随葬馬について」『伊那』第41巻第6号 伊那史学会 1993年
22. 小林正春 「長野の古墳—下伊那の古墳時代の埋葬馬」『日本考古学協会1994年度大会 研究発表要旨』

日本考古学協会 1994年

23. 白石太一郎 「伊那谷の横穴式石室」(1)『信濃』第40巻第7号 信濃史学会 1988年
「伊那谷の横穴式石室」(2)『信濃』第40巻第8号 信濃史学会 1988年
24. 楠本哲夫 「信濃伊那谷座光寺地区の三石室」『研究紀要』第3集 財団法人由良大和古代文化研究協会
1996年
25. 坂本太郎他 『信濃資料』第2巻 信濃資料刊行会 1952年
26. 平田耿二 「第2章第4節信濃国へ」『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』長野県史刊行会 1989
年
27. 牛山佳幸 「第4章第3節駒と信濃布」『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』長野県史刊行会 1989
年
28. 西山克己 「長野県内出土の皇朝十二銭」『長野県埋蔵文化財センター紀要』6 長野県埋蔵文化財セン
ター 1998年
29. 西山克己 「信濃の皇朝十二銭(上)」『伊那』第46巻第4号 伊那史学会 1998年
西山克己 「信濃の皇朝十二銭(下)」『伊那』第46巻第6号 伊那史学会 1998年